

現代方言に残存する《醒世姻緣傳》中の語彙（7）

植田 均
UEDA, Hitoshi

〔提要〕

西周生著《醒世姻緣傳》成書于明末清初，是用當時的北方官話來寫成的。它又是方言詞匯很豐富的一本小说。這些方言詞匯，有的現在已消失，有的至今仍使用。本文詞圖哪些詞在現代方言里繼承下來。

0. 前言

1. 本稿で取り扱う範囲と基本資料

凡例

語彙索引

A~Lǎo（以上、別稿）

Lǎo~Luó（本稿）

M~（以下、次稿）

老瓜 lǎogua（又）lǎoguā（老鴉）

積義：「カラス」。現代共通語では一般に“烏鴉”。

“老瓜”は現代規範化文字では一般に“老鴉”と作る。《現漢》、《古今》は“老鴉”と作り、積義“烏鴉”、方言語彙として収録。《漢語》に“老鴉”を一般語語彙、輕聲語で俗稱とする。《拼音詞匯》に“老鴉”で〈口〉符号を付して収録。

方言辭典類では《漢方常》に“老鴉”（積義“烏鴉”）で北方方言とし、《劉寶瑞表演單口相聲選》より挙例。“老哇”[lǎowā]（積義“烏鴉”）を《河南方言詞匯（續）》、《安慶方言詞匯》、《武漢方言詞匯》、《湖南省耒陽方言記略》に見えるとするだけで地域特定をせず。

《北京話》、《現代北京》、《河北方言》に“老鴉”を収録。《山東》に未収。但し、同義語“老哇”[laʊ⁵⁵uaː]を収録。

《漢方詞》の詞目“烏鴉”項で“老鴉”を指す方言点は官話の北京、濟南、合肥（“老鴉[子]”）で、

南方諸方言には見られない。ただ、“鴉”[kua]の韻頭[k-]が脱落した“哇”[ua]を用いた同義語“老哇”を指す方言点は官語の西安(“[黒]老哇”)、太原(“黒老哇”)、武漢、成都、湘語の長沙(“老哇[子]”)、双峰(“老哇子”)であり、概して北方方言区域に分布する。

《基本词汇集》(p.3706)の詞目“烏鴉”項に“老鴉”を指す方言点は北京、天津、承德、唐山、保定、滄州、石家莊、邯鄲、平山、臨汾、赤峰、海拉爾、黒河、齊齊哈爾、佳木斯、白城、沈陽、丹東、錦州、青島、利津、諸城、濟南、濟寧、商丘、原陽、鄭州、信陽、白河、西安、天水、阜陽、徐州とする。

《漢老大》に“老瓜”(積義“烏鴉”)の方言点を単なる官話で《醒》第五十八回より挙例。また、“老鴉”の方言点を冀魯官話とし、《醒》第五十八回、《蒲松齡集・日用俗字》より挙例。同様に、“鴉”の韻頭[k-]が脱落した“哇”[ua]を用いた同義語“老哇”は広域に渡る。即ち、方言点を冀魯官話、膠遼官話、中原官話、晋語、蘭銀官話、江淮官話、西南官話、呉語、湘語、贛語とする。

“老哇”の同音語“老蛙”(積義“烏鴉”)の方言点を晋語(河北省成安)、呉語(江蘇省溧水)とする。“老鴉”をなぜか未収。

《現漢方大》に“鴉”の韻頭[k-]が脱落した“老哇”(p.1208)(積義“烏鴉”)の方言点を哈爾濱、南京、武漢、西安、西寧、烏魯木齊とする。また、同義語“老哇子”の方言点を烏魯木齊、長沙とする。更に、“鴉”の韻腹[u]すらも脱落した“老啊”(p.1211)の方言点を揚州とする。

“老鴉”(p.1230)(積義“烏鴉”)の方言点を濟南、徐州、貴陽、洛陽、萬榮、成都、婁底、“老鴉(子)”)、福州とする。

《現漢》に“老鴉”“老鴉”いずれも方言語彙とするが、一般に前者が北方方言で、後者が南方方言である。(因みに、《現漢方大》の“老鴉”の方言点を丹陽、萍鄉、績溪、崇明、上海、蘇州、寧波、温州、南昌、黎川、于都、梅県、広州、建甌とする。)

近世語辞典類では《例釋》に“老鴉”(積義“烏鴉”)を《蒲松齡集》より、“老瓜”を《醒》第五十八回より挙例。《方言俗語》、《古方言》に未収。

《醒》の例。

相于廷道：“我夜來拿了個老瓜，網着翅子哩，僭拿了來，頭上也綁个炮焔，…”(58.4a.8)

(“網” = “捆”)

(相于廷は「僕は夜にカラスを捕ったんだけど羽をしばってあるんだ。今、持って来て頭に花火を結わえて、…」といった。)

老官 lǎoguān

積義：「年齢が比較的高い男性」。現代共通語では一般に“年纪较大的男子”。

《現漢》、《汉语》、《古今》に未収。但し、《古今》に“老信”(積義“(1) (~子、~儿) 老年男子。(2) 丈夫”)で方言語彙とする。《補》も“老信”(積義：(1) “年纪较大的男子”。也叫‘老信子’。(2) “丈夫”)で方言語彙とする。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》に人偏のつく“老信”で呉方言、湘方言とし、積義を“对成年男子的一般称呼”で王西彦《春回地暖》より挙例（また、別に積義“丈夫”で《人民文学》1960.9、《湘江文艺》1973.2より挙例）。接尾辞“子”の付接する“老信子”で湘方言、積義を“年老的男子”、王西彦《春回地暖》より挙例。《吴》に“老信”で積義“绍兴等地对成年男子的一般称呼（多指不认识的人）”とする。《河北方言》、《关中方言》、《闽南方言》に未収。

《汉方词》の詞目“男子”項で“老信”を指す方言点は無い。

《基本词汇集》(p.2243)の詞目“老头子”（对老年男性的称呼）項に“老官”は未収。また、詞目“老人”項にも“老官”は未収。

《汉方大》に“老官”（p.1653）（積義“老头儿；老头子（泛指，个别地方含轻蔑义）；称不认识的成年男子”）の方言点を西南官話（雲南省昭通）、呉語（浙江省紹興、杭州、寧波、温嶺、景寧、黄岩）、贛語（江西省波陽）とする。“老官儿”（積義“老头儿”）の方言点を単なる官話とし、《醒世恒言》より挙例。“老官子”（積義“老人家；老年人”）の方言点を湘語（湖南省）とし《湘乡方言》より引用する。

また、“老信”を積義“老头儿；老汉；老头子”（可用于泛称、尊称、贬称）で方言点は西南官話（四川省渡口、江川、玉溪、大理、楚雄。湖南省嘉禾）、呉語（浙江省杭州、温州）、湘語（湖南省）とする。

“老官儿”（p.1694）（積義“泛指老年男子，特指丈夫、父亲”）の方言点を西南官話（四川省成都。雲南省昆明、臨滄、大理、玉溪、新平）とする。“老信子”（積義“老头儿”）の方言点を西南官話（湖南省安郷）、湘語（湖南省長沙、双峰、衡陽、邵陽、湘潭）、贛語（湖南省瀏陽）とする。

《現漢方大》に“老官”（p.1206）は積義（“丈夫”“丈夫的父親”）が異なる。“老官子”の方言点を萍郷（積義“(1) 妻子稱自己老伴。(2) 年老的男子（用不敬的口氣說）。(3) 現在一些年輕人對人稱自己的父親（用不敬的口氣說）”）とする。この按語に“年紀大的人認為只能用於妻子稱丈夫，其他人（尤其是子女）這麼稱呼是沒有教養的表現”とする。ここでは積義（2）が該当する。

また、“老信子”（p.1211）（積義“(1) 老頭兒；老頭子（無明顯感情色彩的區別）。(2) 丈夫”。用‘老信子’稱自己的丈夫，一般是上了年紀的夫妻，年輕人夫婦如此說，多帶諧謔意味）の方言点を長沙、婁底とする。なお、“老信”は積義（“舊稱演戲的人”、“指象棋中的將、帥”、“泛指某人”）が異なる。

近世語辞典類では《古方言》の“老官”（老官儿）項に積義“尊称成年人”とする。この按語に“今吴方言仍有此语，但已无尊敬之意”（p.158）とする。《例释》、《方言俗语》に未収。

《醒》の例。「年輪を経た男性」を指す。

孔夫子在陳，剛絕得兩三日糧，從者也都病了，連這等一个剛毅不屈的仲由老官尚且努唇脹嘴，使性傍氣，嘴舌先生。(33.1b.4)

（孔子が陳にいた頃、丁度二三日食料が絶えた。従者は皆病となり、その中の剛毅不屈の仲由子路ですら口をとがらし癩癩を起し先生に文句を言った）

誰想這等歪人，遭了這等顛沛，他那死期不到，自然鑽出一个救命老官。(88.10b.2)

（ところが思いがけず、このような悪い奴がこんな窮状に遭いながら死期が来ていないのは、勿論命の恩人が出現したのです）

老獾叨 lǎohuāndāo

積義：「老いぼれ、死に損ない」。現代共通語では一般に“老賊；老东西（骂人的话）”。

《现汉》、《古今》、《汉语》、《补》、に未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《山东》に同音語“老獾掏”（積義“椭圆形、口感松软、香甜而且纤维少的一种瓜”）で収録するが意義が異なる。胡適「考証」に収録（積義は無い）。《汉方常》、《现代北京》、《河北方言》に未収。

《汉方大》(p.1703)に積義“老賊（骂人的话）”の方言点を冀魯官話（山東省淄博）とする。

近世語辞典類では《例释》に積義“老賊。骂人的话”で《聊斋俚曲集》、《醒》第六十四回より挙例。《百部小说》にも収録。《方言俗语》、《古方言》に未収。

《醒》の例。黄肅秋注に“老獾儿叨”を“路大荒《淄川土语辞典》释为‘老贼，有骂人的意思。’獾有猪獾、狗獾。老獾儿叨，就是老猪狗的，是鲁东骂人的话”とする。

素姐説：“在我家倒也便易；只是俺公公那老獾叨的咕咕嚙嚙，我受不的他琐碎。…”（64.6a.10）
（素姐は「私の家でやるのはたやすいです。ただ、お義父さん、あの老いぼれがブツブツと言うので、私はあの人のうるさいことに耐えられないのよ。…」と言った）

計老道：“禹大哥，你要不説俺那親家倒還罷了，你要説起那刻薄老獾兒叨的來，天下也少有。…”（9.8b.10）

（計老人は「禹さん、あんたがそやつの事を言わなければそれ迄だったのじゃが、あんたがあひどい畜生の事を言い出すったのでな、それはそれは天下にも珍しいほどですよ！…。」と言った）

老辣 lǎolà

積義：「老練で悪辣である」。現代共通語では一般に“老练狠毒”。

《现汉》、《古今》、《汉语》に積義“(1) 老练；狠毒。(2) 圆熟泼辣”で一般語語彙として収録。《拼音词汇》にも収録。

方言辞典類では《汉方常》に積義“老练”で四川、湖北等地方言とする。《吴》にも収録。従って、北方語系辞典類の《山东》、《北京话》、《现代北京》、《河北方言》に未収。

《汉方大》(p.1664)に積義“(1) 又老又辣（呉語〈上海市〉）。(2) 技术高（湘語〈湖南省〉）。(3) 说话写文章批驳对方非常有力（呉語〈松江〉）。(4) 面相显老（晋語〈山西省嵐県〉）。(5) 味道辣；気味辛辣（膠遼官話〈山東省牟平〉、呉語〈浙江省象山〉）”とあり、いずれも合致するのが無いように思われる。

《現漢方大》(p.1225)に“老辣”（積義“老練”）の方言点を揚州、上海、南寧平話、広州とする。近世語辞典類では《例释》、《方言俗语》、《古方言》に未収。

《醒》の例。黄肅秋注に積義“面皮厚、世故深、不难为情”とする。

俺頓的茶，切的瓜，這三位大相公認生不吃，那一位光頭小相公老辣，吃了兩塊。（40.11b.1）

（私が入れたお茶、切ったウリは、こちらの三人の年の大きな殿方は物怖じして召し上がりません

が、そちらの丸坊主にした年の小さな殿君は世間ずれして二三口食べました)

老娘婆 lǎoniāngpó

積義：「産婆」。現代共通語では一般に“接生婆；收生婆”。

《現漢》、《古今》に“老娘婆”を未収。《汉语》に積義“接生婆”、一般語語彙で収録（但し、《現漢》、《古今》、《汉语》いずれにも“老娘”[lǎoniāng] 積義“接生婆”を一般語語彙で収録。《現漢》、《古今》は“老娘”を旧称とする）。《補》に“老娘婆”（積義“旧称收生婆”）を一般語語彙として収録。

《拼音词汇》に軽声語“老娘”[lǎoniāng]を積義“接生婆”と注記、〈文〉符号を付して収録するも“老娘婆”は未収。〈文〉記号は文語を指すが、文語とは本来「生硬な語彙」に称せられるべきであるが、“老娘婆”の場合「旧白話、文章語」類を指すのであろう。

方言辞典類では《汉方常》に“老娘婆”（積義“接生婆”）を北方方言とし、浩然《艳阳天》、《醒》より挙例。別に、“老娘”[lǎoniāng]を吳方言（積義“收生婆”）とし《鄞县志》“呼穩婆老娘”を引用する（但し、《吳》に未収）。《山东》、《河北方言》、《关中方言》にも“老娘婆”で収録。《北京话》、《现代北京》に“老娘婆”、“老娘”ともに未収。

《基本词汇集》(p.2324)の詞目“接生员”項に“老娘婆”を指す方言点は齊齊哈爾、通化、天水、蘭州、西寧、哈密である。なお、“老娘”を指す方言点は連雲港である。《基本词汇集》のこの詞目の注に“接生婆”、“老娘婆”、“收生婆”、“捡生婆”、“穩婆”、“老娘”を老派の表現法で時に貶義を含むとする。

《汉方大》(p.1696)に“老娘婆”（積義“收生婆；接生员；助产士”）の方言点を東北官話、北京官話、冀魯官話、膠遼官話、中原官話、晋語、蘭銀官話、西南官話、吳語とする。

《現漢方大》(p.1214)に“老娘婆”（積義“舊稱爲人接生的婦女”）の方言点を済南、洛陽、西寧、銀川、太原、崇明とする。

近世語辞典類では《例释》に積義“收生婆”で《醒》第二十回より挙例。《方言俗语》は“老娘婆”を未収。但し、“老娘”の按語に“今江浙及河北滦州皆有此称”とする。同様に、《古方言》の按語にも“老娘”を“今河北、浙江有的地方仍称接生婆为‘老娘’”（同書 p.159）とする。

《醒》の例。

晁夫人道：“怎麼有這樣的奇事。十二月十五日的清早，孕婦也就知覺了。等到二鼓多，那老娘婆說：‘只怕還早，奶奶且畧盹一盹兒。’ …。(22.8a.5)

（晁夫人は「何故こんな不思議な事があるの！十二月十五日の早朝、産気づいたわ。夜の二更過ぎになって産婆さんは『まだ早いかと存じます。奥様少しお休みになられては』と言うのよ。…」と申します）

姜副使又賞了老娘婆銀一兩，二位舅各賞了五錢。徐老娘抱了娃娃進去，姜副使請晁夫人相見道喜。(49.6a.10)

（姜副使はまた産婆に銀子一両を褒美として与えた。二人のおじには各々五錢与えた。徐産婆は赤

子を抱いて入って来ると姜副使は晁夫人を招いて会い、お祝いを述べます)

第二番目の例は“老娘婆”及び“老娘”が同義で続いて用いられている。このように、《醒》に於ても“老娘”が釈義“收生婆”で使用されるのである。次は“老娘”だけの例。

大尹説：“…。…，做個明府，他們後日就要起弄風波，布散蜚語。到分娩了，報本縣知道，就用這個老娘收生。”（20.16a.4）

（大尹は「…。証人を立てるのじゃ。奴らが後日騒動を起こそうとしてウソをでっちあげるからな。産気づいたら本県迄知らせ、この産婆さんに子供を取って貰いなさい」と申されました）

老婆家 lǎopójia

釈義：「女性に対する一般的な呼称」。現代共通語では一般に“妇女；女子”。“家”は接尾辞である。

《现汉》、《古今》、《汉语》、《补》に未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》、《现代北京》、《河北方言》に未収。

《汉方大》（p.1698）に釈義“女人的通称”で方言点を冀魯官話（山東省淄博）、中原官話（山東省臨汾、襄汾、新絳）、晋語（山西省沁県）とする。

《現漢方大》（p.1216）に未収。

近世語辞典類では《例释》に釈義“对妇女的一般称呼。家，词尾”で《醒》第二回より挙例。《百部小说》にも収録。《方言俗语》、《古方言》に未収。

《醒》の例。

心内說道：“这些婆娘，聽不得風就是雨。一个老婆家，雖是娼妓出身，既從了良，怎麼穿了戎衣，跟了一夥漢子打圍，…”（2.2a.5）

（心の中で「これらの女どもは風と聞けば雨と言うしね！一人前の奥さんだよ。娼妓出身とはいえ、今では足を洗っているのにどうして軍服などを着一連の男どもを連れて狩りをするなんて、…」と申します）

老生女兒 lǎoshengnǚ'ér

釈義：「末娘」。現代共通語では一般に“最小的女儿”。

“老生女兒”は多くの辞典類に未収。一般に“老生儿”、“老生子”（共に「末の子」）で収録。

方言辞典類では《汉方常》に“老生女儿”は未収。“老生子”[lǎoshengzǐ]（釈義“父母上了年纪生的最小的儿子”）で山東方言とし、《聊斋俚曲集》より挙例。《河北方言》は詞目“小儿子；老生儿；老生子”等を挙げる。

《汉方大》に“老生女儿”は未収。但し、“老生儿”“老生子”（いずれも釈義“最小的儿子；老年生的儿子”）の方言点を前者中原官話（山東省梁山）、後者冀魯官話（山東省聊城、茌平）、中原官話（河南省睢県。山東省平度）とする。

《現漢方大》（p.1193）に“老生女儿”は未収。なお、“老生閨女”（釈義“舊稱小女兒”）の方言点を

済南とする。

近世辞典類では《例釋》に“老生子”（積義“老年生的儿子”）を《聊齋俚曲集》より挙例。積義“老年生的儿子”とするのは適切ではない。《考論》に“老生女儿”を収録。男性の場合“老生儿儿子”、女性の場合“老生闺女”、“老生儿女儿”とする。即ち、“老生儿”は男女どちらにも用いることができるのである。

《醒》の例。黄肅秋注に積義“晚年最后生的儿女，北方叫做老姑娘或老儿子，犹湖南一带叫做‘滿女’”とする。

做的文章有了五六分的光景，定了姜副使的老生女儿。(36.12b.2)

((彼の) 作る文章は五六分の見込みがあり、姜副使の末娘と婚約しました)

老先 lǎoxiān

積義：「老先生」。現代共通語では一般に“老先生”。

《現漢》、《古今》、《補》いずれにも未収。《汉语》に積義“明代宦官称士大夫曰老先，猶言老先生”で一般語語彙として収録。

方言辞典類では《漢方常》に（“老先”ではなく）“老先生”（積義“对人的一种称呼。多含轻蔑意”）で収録。上海等地方言とし、《上海民间故事选》より挙例。但し、《吳》からの孫引きなのか、そこでは全く同一の用例である。

黄肅秋校注（p.59）に“老先生的省称。有时也称作先儿”とある。《山东》、《北京话》、《现代北京》に未収。《河北方言》の“老先儿”は積義“算命的”とし、意味が異なる。

《漢方大》に積義“先生”で方言点を北京官話（北京市）とし、明・方以智《通雅》卷十九：“先生，今京师或曰老先，吳中曰老生”を引用する。

《現漢方大》に“老先”は未収。なお、同義語“老先生”（p.1196）の方言点を済南、丹陽、杭州、寧波とする。

近世語辞典類では《方言俗語》に“老先儿”と作り、《小尉迟》、《金瓶梅》より挙例。その按語に“明・方以智”《通雅》卷十九：“先生，今京师或曰老先，吳中曰老生”、“今河南、郑州南阳等方言仍有此称”とする。《古方言》は“老先”を元・無名氏《小尉迟》二折より、“老先生：老先儿”を《古今小说》卷十より挙例。《例釋》に未収。

《醒》の例。黄肅秋注に積義“老先生的省称作先儿”とする。

晚生原本寒微，學了些須拙筆，也曉得幾個海上仙方，所以敝府老先合春元公子們也都錯愛晚生。

(4.3a.2)

(私はもともと貧乏の出ですが、少しばかり絵をたしなんでいます。また、幾つか靈驗あらたかな処方的心得ています。従って、私の先生と挙人になられた坊ちゃん達も私を可愛がってくださっています)

錢少宰老先新點了兵部，恨命的央晚生陪他上京。別的老先們聽見，那个肯放？(4.3b.2)

(“恨” = “狠”)

(錢少宰先生は兵部の尚書〈長官〉を新たに任じて下さいまして、彼について上京するよう懸命に懇請されました。これを他の先生が聞きつけまして、誰が放そうとしましょうか?)

老爺子 lǎoyézi

積義：「①老人への尊称。②自分或いは相手の老父に対する尊称」。現代共通語では一般に“①尊称年老的男子。②对人称自己的或对方的年老的父亲”。

《现汉》に上記積義①、②ともに方言語彙として、《汉语》に一般語語彙(積義“(1) 尊称年老的男子。(2) 对人称自己的或对方的年老的父亲”)として収録。《古今》に未収。《拼音词汇》に〈方〉符号を付して収録。なお、接尾辞“子”を省略すると意義が変化する。

方言辞典類では《汉方常》に北方方言として上記積義①を周立波《暴风骤雨》、张孟良《儿女风尘记》より挙例。また、上記積義②を萧軍《过玄的年代》より挙例。《北京话》は上記積義②のみ用法を掲げ、また、《山东》は積義②に加えて更に「年配女性が自分の夫を称する時に用いる」という。《现代北京》には上記①、②の積義を有す。

《河北方言》の詞目“老头儿”及び“老头子”項に“老爷子”を収録。特に天津では「父親」を指すという。

《汉方大》に上記積義①の方言点を東北官話、北京官話、冀魯官話、中原官話、晋語とし、積義②の方言点を東北官話、冀魯官話、膠遼官話とする。

《现漢方大》(p.1219)に“老爺子”(積義“(1) 對年老的男子的尊称。(2) 對人稱自己或別人的年老的父親”)の方言点を哈爾濱とする。

近世語辞典類では《例釋》、《方言俗語》、《古方言》に未収。

《醒》の例。上記積義①の場合。

我看這位老爺子也是年高有德的人，你兩句濁語喪的去了。(80.10a.8)

(ワシは、こちらのご老人は高齢で徳の高い方だと思う。お前の愚かな言葉はいやな気にさせてしまうよ)

積義②の場合。

爺兒兩個，跟着一个管家，一個厨子。老爺子有六十歲年紀了。小相公纔十九，好不標致。(54.3a.6)
(親父と息子の二人に一人の番頭と料理人がお供をしている。親父は六十で坊ちゃんは十九歳になったばかり。とても器量良しです)

家裏奶奶子說：“老爺子，你要留下指使就留下，既不留下，就趁早兒給了人家，就誤了人家待怎麼。”(55.8a.6)

(家の奥様は「旦那様、あなたが置いて使いたいなら置けばよいのです。置かないなら早めに人様に返すのです。遅らせて人様を待たせてどうするのですか?」と申します)

老咎晚 lǎozǎnwǎn

積義：「とても遅い」。現代共通語では一般に“很晚”。

《現漢》、《古今》、《漢語》、《補》に未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《漢方常》、《山東》、《詞北方言》に未収。

《漢方大》に未収。

《現漢方大》に未収。

近世語辞典類では《例釋》に“老咎晚”“老咎晚”（積義“晚；很晚”）を《醒》第四十回、四十四回より挙例。《百部小説》にも“老咎晚”（積義“時間已经不早”）で《醒》第四十回より挙例。《方言俗語》、《古方言》に未収。

《醒》の例。黄肅秋注に積義“就是老早晚，時間已经不早”とする。なお、《醒》において積義「私達」は“僭”字を用いるが、ここの積義「とても遅い」は“咎”字を用い明確に使い分けしている。

狄婆子說：“天夠老咎晚的了，睡去罷。我也待睡哩。”（40.11b.9）

（狄奧さんは「もうかなり遅いから寝に行きなさい。私も寝ますから。」と申します）

薛婆子說：“這天夠老咎晚的了，叫閨女睡會子好起來，改日說罷。”（44.9b.2）

（薛奧さんは「随分遅くなりました。娘に少し眠らせてあげないと起きられませんよ。またの日に話しして下さい」と申します）

他娘說：“這天老咎晚的了，你往屋裏去合媳婦做伴去罷。”（45.1a.8）

（彼の母親は「とても遅くなったよ。お前は部屋へ行ってお嫁さんの相手をしてあげ」と申します）

媒婆…說道：“天已老咎晚了，你不吃酒，留下定禮，往家去罷。”（72.12b.4）（“已” = “己”）

（取り持ち女が…「もう随分遅くなりました。お酒を飲まないなら結納を納め、私たちは家へ帰りましょう」と申します）

姥姥 lǎolao （老老）

積義：「おばあちゃん（外祖母）」。現代共通語では一般に“外祖母”。

《現漢》、《古今》、《漢語》いずれにも積義“外祖母”一般語語彙、輕声語として収録。《拼音词汇》にも“姥姥（老老）”で収録。

方言辞典類では《漢方常》に積義“外祖母”で北方方言とし、知侠《铁道游击隊》より挙例。《北京話》、《現代北京》、《河北方言》にも収録。《山東》に未収。

《漢方詞》の詞目“外祖母”項で“姥姥（老老）”を指す方言点は官話の北京のみである。（“老老”と作るが、“老” = “姥”とする）。

《基本词汇集》（p.2344）の詞目“外祖母”に“姥姥”を指す方言点は北京、天津、承德、唐山、保定、滄州、石家莊、邯鄲、張家口、陽原、大同、忻州、長治、集寧、呼和浩特、赤峰、二連浩特、海拉爾、黑河、齊齊哈爾、哈爾濱、佳木斯、白城、長春、通化、沈陽、丹東、錦州、商丘、鄭州、原陽（“姥

姥”）、信陽とする。

《汉方大》に方言点を東北官話、北京官話、冀魯官話、中原官話、晋語とする。

《現漢方大》に“老老”（p.1194）（積義“外祖母”）は未収。“姥姥”（p.2965）（積義“外祖母”）の方言点を洛陽、銀川、太原とする。

近世語辞典類では《方言俗语》の按語に“北京方言有此语”とする。《例释》、《古方言》に未収。《醒》の例。

“四歳了。讒往姥姥家去，在家裏可不叫他見狄爺麼。”（54.2b.10）

（「四才になります。お婆ちゃんの家へ行ったばかりです。家では狄旦那様にお目にかからせませんでしたかね？」）

勒措 lēiken (又) lēikèn

積義：「圧迫する、わざと嫌がらせをする」。現代共通語では一般に“刁难；强迫”。

《现汉》、《古今》に積義“强迫或故意为难”で方言語彙、《汉语》に轻声語 [lēiken] で一般語語彙とする。（別に、《汉语》は「“勒措” [lèkèn] で積義（1）“勒索”〈財物を奪う〉、見《水滸傳》。（2）“强迫”〈強迫する〉、見宋本話本」とする。《拼音词汇》に〈方〉符号を付して収録。

方言辞典類では《汉方常》に北方方言とし、積義を二つ挙げる。（1）“勒逼；故意与人为难”を《红楼梦》より挙例。（2）“强要别人拿出钱來”を《金瓶梅》より挙例。《山东》にも収録。（積義“（1）刁难。（2）折磨”）。《关中方言》に“《说文》：‘勒，马头落衔也’。段注：‘落络古今字。…此云落衔者落其头而衔其口，可控制也。引申之，为抑勒之义’。‘措’有刁难义（见《现汉》）”とする。《北京话》、《现代北京》、《词北方言》に未収。

《汉方大》（p.5275）に積義“刁难”の方言点を膠遼官話（山東省萊陽、榮城、牟平）、中原官話（河南省）とし、《醒世恒言》、《岐路灯》、《西游记》より挙例。

《現漢方大》（p.3600）に“勒措”（積義“强迫或故意爲難”）の方言点を西寧とする。

近世語辞典類では《方言俗语》に積義“强迫人做某事故意给别人为难。这样做常常是为了索取财物”を《鲁斋郎》一、《渔樵记》四、《西游记》第五十三回、《儿女英雄传》第二十四回、《金瓶梅》より挙例。《古方言》の [lè] 項に“勒措（擻措；累措；拗措）”を積義“卡扣；强逼”とする。《例释》に未収。

《醒》の例。

這侯小槐却又没有這般膽量，急急的把自家祖屋減了賤價出典與人，典的時節還受了他許多勒措。

（42.2a.8）

（この侯小槐はそのような度量はなく、慌てて自分の先祖伝来の家を安値で抵当に入れた。その時更に多くの嫌な思いをした）

花子再三勒措，劉振白又着實的說合，四個花子足足的共詐到八兩文銀。（80.8b.9）

（物乞いは再三難癖をつけ、劉振白は本当に取り持ちした。四人の物乞いはたっぷりと全部で八兩の馬てい銀を騙し取った）

稜 lēng（稜；楞）

積義：「ぶつ、なぐる」。現代共通語では一般に“打；揍”。

《現漢》、《古今》、《汉语》、《補》に“稜；楞；稜”の積義を未収。

方言辞典類では《漢方常》に“楞”[lēng]（積義“抡起棍棒打”）と作り、北京、天津、山東地方言とする。《山東》も“楞”（積義“(用力) 砸”）と作る。《北京話》、《現代北京》に“稜”[lēng]（積義“用棍棒用力打”）で収録。《河北方言》に未収。

《漢方詞》の詞目“打”項に“稜；楞；稜”を指す方言点は無い。

《漢方大》(p.5888)は“稜”（積義“(用木棍) 打”）で方言点を北京官話（北京市）、冀魯官話（山東省）とし、《醒》第八十九回より挙例。また、“楞”(p.6393)（積義“用棍棒击、打”）で方言点を冀魯官話（天津）、中原官話（山東省聊城）、河北省（魏県。河南商丘）とする。

《現漢方大》の“楞”(p.4743)、“稜”(p.4230)にこの種の積義は未収。

近世語辞典類では《百部小説》に“楞”で方言語彙とする。《例釋》、《考論》に“稜”（積義“打”）で収録。《古方言》は蒲松齡《磨難曲》、《醒》より挙例し、その接語に“‘稜’，今俗读阴平”とする。

《醒》の例。黄肅秋注に積義“打；揍”とする。

你氣頭上稜兩棒槌，萬一稜殺了，你與他償命。(89.9b.2)

（お前が腹を立てて棒で殴り、万一殴り殺したなら命の償いをするのかい？）

冷眼溜冰 lěng yǎn liú bīng（冷眼溜賓）

積義：「冷ややかに傍観する」。現代共通語では一般に“冷眼旁观”。

《現漢》、《古今》、《汉语》、《補》に未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《漢方常》、《山東》、《現代北京》、《河北方言》に未収。

《漢方大》(p.2885)に“冷眼溜冰”（積義[熟語]“冷眼旁观”）の方言点を冀魯官話（山東省）とする。また、同義語“冷眼溜賓”の方言点を冀魯官話（山東省）とする。

《現漢方大》(p.1891)に“冷眼溜冰”は未収。

近世語辞典類では《例釋》に“冷眼溜冰”“冷眼溜賓”（積義“冷眼旁观”）で《醒》第五十三回、六十回より挙例。《百部小説》に収録。《方言俗語》、《古方言》に未収。

《醒》の例。黄肅秋注に積義“站干岸儿、看好瞧儿”“賓同冰，即冷眼旁观”とする。

那魏三出名冒認，豈口無因。恨不得晁夫人家生出甚麼事來，幸災樂禍，冷眼溜冰。(53.2a.3)

（かの魏三が出てきて偽称したのも原因が全くない訳ではない。晁夫人の家で何か問題が生じてほしい、人の禍は我が幸せで、冷ややかに傍観するというものだ）

龍氏見央人不動，只得又大哭起來，哭道：“不睜眼的皇天。爲甚麼把孩子們都投在我那肚子裏頭。叫人冷眼溜賓的。”(60.7a.5)（“賓”＝“賓”）

（龍氏は、頼んでも皆が動かないので、仕方なく大泣きし「神様は目が見えないの！なぜこんな子供達を私の腹の中へお入れなされたの？冷ややかに傍観する子供達を！…」と大泣きして言った）

灘灘拉拉 līlālā

积義：「ポタポタ、ポタポタ、サラサラ落ちる」。現代共通語では一般に“滴滴打打，连续不断；淋淋漓漓”。

《现汉》、《古今》、《汉语》、《补》に“滴滴拉拉”では未収。《现汉》、《古今》に“哩哩啦啦”（积義“零星或断断续续的样子”）を一般語語彙として収録。《拼音词汇》に“哩哩啦啦”で収録。

方言辞典類では《汉方常》に“哩哩啦啦”[līlālā]（积義“零零散散或断断续续的样子”）で北方方言とし、《人民文学》1977.12、《散文诗写选》より挙例。《山东》に“漓拉”（积義“液体或颗粒状固体撒落”）で収録。《现代北京》は“哩哩啦啦”（积義“淋淋漓漓；丢丢撒撒”）で収録。《河北方言》に未収。

《汉方大》(p.6702)に积義“液体不断往下流淌的样子”の方言点を冀魯官話（山東省淄博）とする。

《現漢方大》(p.6318)に“灘灘拉拉”（积義“(1) 移動過程中的液體一點兒一點兒地滴落，或移動過程中的東西一點兒一點兒地撒落。(2) 斷斷續續”)の方言点を哈爾濱、太原とする。また、“灘灘拉拉的”（积義“(1) 形容液體斷續灑下。(2) 事情辦得拖拉”)の方言点を済南とする。

近世語辞典類では《例释》に[lī]項で“漓漓拉拉”（=“哩哩啦啦”）（积義“液体不断往下流淌的样子”）を挙げ《醒》より挙例。《方言俗语》、《古方言》、《百部小说》に未収。

《醒》の例。

這晁無晏只見他東瓜似的搽了一臉土粉，抹了一嘴紅土胭脂，灘灘拉拉的使了一頭棉種油，散披倒掛的梳了个雁尾，…。(53.6a.1)

（晁無晏は、トウガンのような顔一面に野暮ったいおしろいを塗っている。また、口一杯野暮ったい口紅を塗りたくっている。そして、ポタポタと頭一杯野暮ったい綿実油を使っている髪、それもサンバラで雁尾形に結っているのを見て、…。）

素姐只接過手來看了一看，他就焦黃了个臉，通沒了人色，從褲襠裏灘灘拉拉的流尿，…。(64.9b.8)
（素姐が手に取って見ると、彼の顔は真っ青になり、完全に人色を失ってズボンからポタポタと小水を漏らした。…）

離母 límǔ

积義：「根拠がない」。現代共通語では一般に“没有根底”。

《现汉》、《古今》、《汉语》、《补》に未収。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》、《现代北京》、《河北方言》に未収。

《汉方大》(p.5031)に“离了母”（积義“离了谱儿”）の方言点を冀魯官話（山東省淄博）とする。

《現漢方大》(p.6092)に“离（了）母”は未収。

近世語辞典類では《例释》に“离了母”（积義“离了谱；没有根底”）を《醒》第四十六回より挙例。

《百部小说》にも“离了母”（积義“离了谱；失去本来面目”）で収録。《方言俗语》、《古方言》に未収。

《醒》の例。黄肅秋注に积義“母，模子转音。离了母，失去原型”とする。

我見他說的話離了母，我恐怕他後來改了口，所以哄他叫寫个稟帖給我做了憑據，叫他改不得口。

(46.9a.4)

（ワシは、奴が言った内容が根拠ないものだと思ったのじゃ。奴が後で言い替えるのではないかと考え、奴に上申書を書かせ証拠としてワシに出させておいたのだ。奴に後で話の内容を変えられないようにな）

理論 lilun

釈義：「気にとめる、心にかける」。現代共通語では一般に“在意；介意”。

《現漢》、《汉语》、《補》にこの意味では未収。《古今》に釈義“注意；顾及”で近世語彙として収録。《拼音词汇》に軽声語では未収。即ち、この意味では未収。

方言辞典類では《漢方常》に北方方言として《紅樓夢》より挙例。《山東》、《北京話》、《現代北京》、《河北方言》に未収。

《漢方大》(p.5247)に“理論”(釈義“在意；介意”)の方言点を冀魯官話(河北省)とする。

《現漢方大》に未収。

近世語辞典類では《例釋》、《方言俗語》、《古方言》に未収。

《醒》の例。

大人の飯食、有甚麼稽查。脱不了憑他們廚房裏支撥，大官人没有工夫理論這個小事。(19.4a.4)
 (お金持ちの人は家の食べ物に対して何の調べがあるものですか？どうせあの人達の台所から出した物でしょ。旦那様はこんな些細なことに目くじらをたてる暇がないのですよ)

後來又是个孟通判署印，連夜裏也做了白日，還不夠放告問刑的工夫，那裏理論到監裏的田地。

(14.9a.3)

(のち、孟通判が代行しました。夜も昼間のように行いましたが、おふれを出し訴えを聞き刑を問う時間が足りません。従って、監獄の中のことまで触れる余地はありません)

この他に、“理論”に釈義「言い争う」の例が見える。これは現代方言にも継承されていない。その例。

後來我接着往他家走，周大叔爲人極喜洽，見了人好合人頑，我也没理論他。(72.10b.1)

(後、私は引き続いてその人の家へ行きましたが、周大叔は人柄が非常に温厚な人で、人と会っても愉快で、私も言い争ったことはありません)

利巴 liba (力巴)

釈義：「素人、不案内の人」。現代共通語では一般に“外行(人)；门外汉”。

現代規範化文字では一般に“力巴”とする。《現漢》、《古今》に“力巴”(釈義“(1)外行；不熟练。(2)外行人”。也叫力巴头)で方言語彙、軽声語として、《汉语》に一般語語彙として、いずれも“力巴”と作る。《拼音词汇》にも“力巴”で〈方〉符号を付して収録。広く使用される方言であると解される。

方言辞典類では《漢方常》に“力巴”(釈義“(1)外行。(2)外行人”)で北京等地方言として文康《几

女英雄传》より挙例。《山东》、《现代北京》、《河北方言》にも“力巴”で収録。《北京话》、《徐州方言志》に未収。

《汉方大》に“利巴”（p.2695）釈義（1）“外行”の方言点を中原官話（山西省永濟。也作“利把”とし、この方言点を山西省汾西）、晋語（山西省榆次、定襄、太谷、嵐県）。也作“利八”とし、この方言点を晋語（山西省太原、大同）、也作“利把”とし、この方言点を晋語（山西省靈石）とする。また、釈義（2）“外行人”の方言点を晋語（山西省大寧）とする。

一方、“力巴”（p.151）（釈義“外行”）の方言点を東北官話（遼寧省錦州。黑竜江省綏化）、北京官話（北京）、冀魯官話（天津。山東省済南）、中原官話（青海省西寧。山西省臨汾。山東省曲阜）、晋語（山西省忻州、陽曲）とし、《儿女英雄传》より挙例。なお、釈義“外行人”は未収。

《基本词汇集》（p.2255）の詞目“外行”項に“利巴”を指す方言点は大同、太原、臨汾、錦州、煙台、青島、敦煌、西寧とする。また、“利八头”を指す方言点は済南、済寧とする。なお、“力巴”は未収。

《汉方词》の詞目[名詞]“外行”（例：他是个外行）の項で“力巴”を指す方言点は、官話の北京（“力巴儿”）、済南（“力巴头”）、太原（“利八”）である。また、詞目[形容詞]“外行”（例：他很外行）の項で“力巴”を指す方言点は同じく官話の北京、太原（“利八”）である。

《現漢方大》に“力巴”（釈義“外行”）の方言点を哈爾濱とする。釈義“外行；外行人”の方言点を西寧、忻州とする。同義語“力巴頭”（釈義“外行”）の方言点を哈爾濱、済南とする。また、同義語“力巴頭”とも作り、方言点を銀川とする。同音語“利巴”（p.1803）（釈義“外行；外行人”）の方言点を萬榮とする。

近世語辞典類の《古方言》の“力把”（劣把）を釈義“外行；外行人”とする。《例释》、《方言俗语》に未収。

《醒》の例。これは名詞の用法である。黄肅秋注に釈義“亦作戾把、力把。外行、门外汉”とする。

這樣南京的雜貨原是没有行款的東西，一倍兩倍，若是撞見一個利巴，就是三倍也是不可知的。

(63.3a.5)

(このような南京の雜貨は元々基準がないので倍にでもつり上がる。もし、素人に対してなら三倍にしても分からない)

利便 libian (又) libiàn

釈義：「便利である」。現代共通語では一般に“方便；便利”。

《現漢》に未収も、《古今》、《补》に釈義“方便；便利”で方言語彙として、また《汉语》に一般語彙として収録。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》に釈義“方便；便利”で北方方言、閩方言として王統照《山雨》より挙例。《山东》に“利便”（釈義“行动方便；不拖累别人”）の省内方言点を寿光、青州とする。《北京话》、《现代北京》、《闽南方言》にも収録。《河北方言》に未収。

《汉方大》に未収。

《現漢方大》(p.1804)に“利便”(積義“使用或行動起來不感覺困難；容易達到目的；便利”)の方言点を廣州、福州、廈門とする。

近世語辞典類では《例釋》、《方言俗語》、《古方言》に未収。

《醒》の例。

狄希陳甚是得意，以爲寄姐過門，諸凡或不希罕，得這樣利便丫鬟，無有不中意之理。(76.1b.5)

(狄希陳はとても得意になっています。寄姐が嫁に来るのは或いはごく普通ですが、このような重宝な侍女を手に入れることは気に入らない筈がありません)

那江邊沙灘之上，穿的又都是那低頭淺跟的鞋襪，跑得甚不利便，又被捉回來了兩個，一頓扯拽進城去了。(99.11b.7)

(その川のほとりの砂浜で、穿いているのは全て浅いかかとの履物ゆえに、走るには甚だ不便です。

二人とも捕まえられ、まとめて町へ引っ張られてゆきました)

利亮 liliang (又) liliàng (俐亮)

積義：“①すがすがしい、せいせいしている。②はっきりしている、よく通る」。現代共通語では一般に“①爽快；干脆。②流利；响亮”。

《現漢》、《古今》に未収。《補》に“利亮”(積義“利落”)で方言語彙として、《汉语》に“俐亮”(積義“爽快”)と作り、一般語語彙として収録。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》に積義“利落”(てきぱきしている、きちんとしている)で河南、山東等地方言とし、徐慎《初春时节》より挙例。《山东》にも“利朗”(積義“(1)干脆利落。(2)整齐有条理”)で収録。(なお、《山东》の“利亮”は積義“(1) (環境) 整洁。(2) 打扮得干净、漂亮。(3) 事情办理得妥善、快当。(4) 宽敞”で指す内容がやや異なる)。《北京话》、《現代北京》に未収。

《汉方大》に“利亮”(積義“说话办事干脆利落”=上記積義①)で方言点を東北官話(東北)、冀魯官話(山東省)、中原官話(河南省洛陽、羅山。江蘇省徐州)、晋語(河南省汲県)とする。

《現漢方大》(p.1804)に“利亮”(積義“(1) 利落；整齐有条理。(2) 完；完蛋”)の方言点を哈爾濱とする。

近世語辞典類では《例釋》に積義“利落；干脆”で《聊斋俚曲集》、《醒》第五十八回より挙例。その按語に“今方言中，‘利亮’还有‘敞亮’的意思”とする。《古方言》に積義“利落”とする。《方言俗語》に未収。

《醒》の例。上記積義①の場合。

剩了这个瑕疵，拿这件事来压住他，休了他，好离门离户，省得珍哥刺恼，好叫他利亮快活，扶他爲正。(9.1b.1)

(この傷に乗じ、今度の事を持ち出して彼女に圧力をかけ、離縁しよう。断絶すれば、珍哥を怒らせなくて済むし、珍哥にわだかまりなく楽しく過ごせることができ、彼女の方を正妻にしようと考え

えた)

既然要回家住幾日，不買點子甚麼哄哄奶奶，爺也得利亮起身麼。(86.4b.2)

(家へ戻って何日か住むからには何かしらを買って奥様のごきげんをとれば、旦那様もきっぱりと出発できるではありませんか?)

また、“俐亮”とも作る。その例。

你可說怕死，這下地獄似的，早死了早托生，不俐亮麼。(58.6b.5)

(あなたは死ぬのを恐れているけれども、今地獄のようなんだよ。早く死んで早く転生する方がせいせいするんじゃないの?)

“俐亮”は前記積義②“流利；响亮”の用法も見える。黄肅秋注に積義“流利；嘹亮”とする。その例。

見了爹娘，喘吁吁的就如曹操酒席上來報顏良的探子一般，話也說不俐亮；主意是要棄了爹娘，…。

(7.8a.7)

(おとつあんとおっかさんに会いますと、はあはあ喘ぐのはさながら曹操の宴席に顔良の貞察員が報告に来たようなもので、話もはっきりしません。気持ちはおとつあんとおっかさんを捨てて、…)

利市 lishi (利事)

積義①：「祝儀、チップ、心付け」。現代共通語では一般に“赏钱”。

《现汉》、《古今》に“利市”（積義“送给办事人的赏钱”）で方言語彙として、《汉语》に粵俗として収録。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》に“利事”（積義“长辈赏给晚辈的钱”）と作り広州方言とする（別に吳方言で積義“喜事”とし、《盛湖志补》：“喜事曰利事”を引用）。《广州话方言词典》に“每逢红白喜事为了酬谢亲友的帮忙而赠送的钱，叫‘利市钱’”とする。《山东》、《北京话》、《现代北京》、《河北方言》に未収。《吴》にこの意味では未収。

《汉方大》に“利市”（積義“赏钱”）の方言点を江淮官話（湖北省浠水）、西南官話（四川省成都。貴州省遵義）、吳語（江蘇省太倉、璜涇）、粵語（広東省広州）とする。また、“利事”の方言点を粵語（広東省広州。香港）、“利是”の方言点を客話（広東省惠州、東莞清溪、深圳沙頭角）、粵語（広東省広州、中山石岐、鶴山雅瑶、東莞莞城。香港）とする。

《現漢方大》に“利市”（p.1803）（積義“指用紅紙包的錢，俗稱‘紅包’”）の方言点を梅県、南寧平話、広州とする。この他の方言点を柳州（積義“(1)春節期間給小孩的壓歲錢。(2)辦喜事酬謝親友幫忙的錢，酬謝吊唁者用白紙包少量錢也稱利市”）、于都（積義“指錢，是一種討吉利的說法”）とする。同音語“利是”（p.1802）の方言点を東莞（積義“紅包錢；壓歲錢”）とする。なお、“利事”は未収。

近世語辞典類では《古方言》に積義“喜钱”で宋・周蜜《武林旧事・岁晚节物》、《清平山堂话本・快嘴李翠蓮記》より挙例。《例释》、《方言俗语》に未収。

《醒》の例。

那郎中喜得滿面添花。劉夫人封出二百錢來做開藥箱的利市。(8.8a.5)

(その医者は喜んで満面の笑みを浮かべています。劉夫人は二百錢を包み出し、初診の心付けとします)

店家落得賠了兩日的粥湯，又出了陰陽生洒掃的利市。(27.11a.10)

(店の主人は二日間の粥代金を支払い、また、陰陽師に修復してもらおう心付けを出しました)

積義②：「[形容詞]幸運である」。現代共通語では一般に“吉利；运气好；幸运”。

《現漢》、《古今》に“利市”（積義“吉利”）で方言語彙として、《漢語》に一般語語彙として収録。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《漢方常》に“利市”（積義“(1) 买卖顺利的预兆。(2) 运气好；吉利”）で吳方言とし、《沫若文集》第三卷より挙例（積義“喜事”）。《漢方常》の“利市”では名詞の用法（“喜事”）しか掲げていないが、《吳》の“利市”に[名詞]“喜事”と[形容詞]“运气；幸运；吉利”の意味用法を挙げる（更に[名詞]「商売が順調な兆し」（“买卖顺利的预兆”）の用法も示し、計三種の積義を有す）。北方方言系の《山東》、《北京話》、《現代北京》、《河北方言》に未収。

《漢方詞》に未収。

《漢方大》は積義[形容詞]“吉利；幸云”の方言点を西南官話（広西壮族自治区宜山）、吳語（江蘇省蘇州、常州、江陰）、閩語（広東省電白）とする。

《現漢方大》に“利市”（p.1803）（積義“吉利”）の方言点を温州、金華、梅県、南寧平話、広州、とする。この他の方言点を杭州、寧波（共に積義“買賣順利的兆頭”）とする。同音語“利是”の方言点を東莞（積義“吉利話”）、海口（積義“吉利”）とする。なお、“利市”は未収。

近世語辞典類では《古方言》に積義“喜钱”で宋・孫光宪《北夢瑣言》、元・康进之《李逵負荆》、元・楊景賢《西游记》より挙例。《例釋》、《方言俗語》に未収。

《醒》の例。

狄婆子女人見識，說這個成親的吉日，兩口子不在一處，恐有不利市的一般，又走到他那邊去，指望叫他開門。(45.2a.10)

(狄奥さんは女性として、結婚する日は夫婦二人が一緒でないと不吉だと考えた。そこで、再び彼女の所へ行き、戸を開けるよう頼んだ)

哩 li

積義：「[助詞]①疑問文の文末に用い、疑問の語気を表す。②陳述文の後に付けて確認・誇張の語気を表す」。現代共通語では一般に（積義①、②ともに）“呢”。

積義①は《現漢》、《古今》に未収。上記積義②の項で《現漢》に方言語彙で“跟普通话的‘呢’相同，但只用于非疑問句”（疑問文には用いない）と注記する。《漢語》に「語助詞」とのみ説明する。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《漢方常》に北方方言で積義[助詞]“(1) 呢（用于非疑問句）。(2) 啦，用于列拳。(3)

的”とする。ここでは(1)が該当するが、《現漢》と同様に“用于非疑問句”と注記するにもかかわらず、疑問文に用いる用法が《醒》で行われている。“哩”が疑問文に於ても用いるのであるが、これは現代方言にも継承されていない。《山東》、《河北方言》に未収。

《現漢方大》(p.3180)到北京語の“呢”に概ね相当するのは北方語であるという。ただ、疑問文にも用いる方言点は南京、萬榮、忻州、福州とする。

近世語辞典類でも《例釋》、《方言俗語》、《古方言》、《金瓶梅詞典》に未収。

《醒》の例。

到了年時三四月裏，退了毛，換了个白獅猫。頭年裏蔣皇親見了我，還說：‘你拿的我紅猫哩’。我說：‘合人家搭換了个白猫來了。’ (7.2a.8)

(昨年の三四月に毛が抜けて白い獅子の猫になりました。去年、蔣皇親が私に会って『お前が持っていたワシの赤い猫は?』と尋ねたので、私は『よその白猫と交換したわ』と答えました)

相于廷兇兇的走到他房門口連叫道：“狄大哥哩。” (60.12a.8)

(相于廷は荒々しく彼の部屋の入り口で続けざまに「狄兄貴は?」と叫びました)

一方、“哩”が現代中国語の方言に残存していると一般の辞典類で明記するのは、前記積義②「陳述文の後に付けて確認・誇張の語気を表す」場合である。これはよく“[形容詞]+着哩”、または“才+[形容詞]+哩”の形をとる(後出の[zhe]項“…着哩”を参照)。

《現漢》、《古今》に積義“跟普通話的‘呢’相同，但只用于非疑問句”で方言語彙とする。《漢語》は[語助詞]とするだけで用例を挙げていない。《拼音詞匯》に未収。

方言辞典類では《漢方常》に北方方言とし、趙樹理《三里灣》より挙例。《山東》に未収。

《漢方大》にこの種の“哩”は未収。しかし、積義を単に“呢”とすれば、方言点を北京官話(通県)、中原官話(山西省襄汾。河南省鄭州。陝西省)、晋語(山西省和順、忻州。河南省湯陰、)吳語(上海市。江蘇省蘇州)、贛語(江西省蓮花)とする。

《現漢方大》(p.3180)に“哩”(「陳述文の文末に用い、確認・誇張の語気を表す」)の方言点を揚州、南京、萬榮とする。

近世語辞典類では《例釋》、《方言俗語》、《古方言》、《金瓶梅詞典》に未収。

《醒》の上記積義②の例。“…着哩”の場合。

舅爺說：“這說起來話長着哩。他正妻是計氏，…” (18.6b.2)

(義兄は「これは話せば長くなるよ。彼の正妻は計氏なんだ。…」と言った)

尚書道：“約模有八十多了，還壯實着哩。” (23.6a.2)

(尚書は「大体八十歳余りです。でも、丈夫そのものですよ」と言った)

次は、“哩”のみの例。

這顧家的洒線是如今的時興，每套比尋常的洒線衣服貴着二兩多銀哩。(65.8b.7)

(その顧家の刺繍は現在のはやりで、どれも普通の刺繍服より値が銀子二両余り高くなります)

連毛 liánmáo

積義：「長髪の」。現代共通語では一般に“带发”。

《現漢》、《古今》、《汉语》、《補》いずれにも未収。

方言辞典類では《漢方常》に“连毛儿僧”（積義“久不理发、刮须的人”）として北方方言で張天民《創業》より挙例。《現代北京》も“连毛儿僧”で収録。《山東》、《北京話》、《河北方言》に未収。

《漢方大》にこの種の用法は未収。

《現漢方大》（p.3115）にこの積義は未収。

近世語辞典類では《古方言》に“连毛姑子”（積義“带发尼姑”）で《醒》第十回より挙例。但し、下記例に示す如く“连毛”の後には他の語も入り得る。《例釋》、《方言俗語》に未収。

《醒》の例。黃肅秋注に積義“带发”とする。

一個連毛姑子叫是海會，原是他親戚家的丫頭，後來出了家；…。(10.10a.6)

（髪の毛を伸ばした尼は海會と申します。元々親戚の娘で、のち出家しました。…）

小的告做証見的海會是个連毛的道姑，郭姑是尼姑，常在妹子家走動。(12.6a.2)

（私の訴えに、証人となる海會は髪を伸ばした女道士で、郭姑は尼でした。よって、いつも妹の家へ行き来していた、ということです）

撩 liáo

積義①：「縫う」。現代共通語では一般に“縫”。

《現漢》、《古今》、《汉语》、《補》に未収。但し、《現漢》、《古今》に同音語“繚”（積義“用針斜着縫”）で収録。

方言辞典類では《山東》に“繚”（積義“用不相連的小針脚縫”）の省内方言点を臨朐、棗莊、桓台とする。《現代北京》、《河北方言》、《關中方言》にも“繚”で収録。《漢方常》にこの意味では未収。

《漢方大》（p.7028）に“撩”（積義“縫”）（“繚”字では“縫”の積義未収）の方言点を東北官話（東北）、冀魯官話（山東省）、中原官話（山東省鄒城）、西南官話（広西壮族自治区宜山）とする。

《現漢方大》（p.5345）に“撩”（積義“大針脚地縫”）の方言点を牟平とする。

近世語辞典類では《例釋》に“撩”（積義“縫”）で《醒》第五十三回より挙例。《古方言》に収録。《百部小説》、《方言俗語》にこの意味では未収。

《醒》の例。

漓漓拉拉的使了一頭棉種油，散披倒掛的梳了个雁尾，使青棉花線撩着。(53.6a.2)

（ボトボトと落ちるくらいに頭一杯綿実油を使っている。また、髪をさんバラにして雁尾形に結っている。そして青い綿糸で縫っている）

積義②：「つかまえる、つかむ」。現代共通語では一般に“抓；撈”。

《現漢》、《古今》、《汉语》、《補》に未収。

方言辞典類では《漢方常》に吳方言（積義“用手或工具取在远处或高处的东西”）で越劇《九斤姑娘》

より挙例。

《汉方大》に积義“抓；捞；寻取；用手或工具伸取放在远处、高处或深处的东西”の方言点を冀魯官話（山東省淄博）、呉語（上海市松江。浙江省杭州、寧波、紹興、定海、蕭山、蒼南金郷。江蘇省蘇州、常州、無錫、薛典、常熟、江陰）、贛語（湖南省瀏陽）、閩語（広東省汕頭）とする。

《現漢方大》(p.5345)に“撩”の方言点を上海（积義“捞”）、寧波（积義“伸長手臂或借助工具向遠處或河裏取物”）、温州（积義“捞取”）とする。

近世語辞典類では《例释》に积義“捞；抓”で《醒》第五十七回より挙例。《古方言》、《方言俗语》、《百部小说》にこの意味では未収。

《醒》の例。黄肅秋注に积義“逮住、捉住”とする。

晁夫人道：“怪孩子，我叫你去來麼。誰叫你專一往街上跑，叫他撩着了。你肚子大大的是有病麼。…”（57.9a.4）

（晁夫人は「変な子だね。私がお前を行かせたかい？誰かが外へ走って行かせたからやっこさんに捕まったんだというのかい？お前の腹が大きくなっているのは病気なのかい？…」と申します）

臊子 liáozi

积義：「陰莖」。現代共通語では一般に“人或动物雄性的生殖器（常用于骂人）”。

《現漢》、《古今》、《補》に未収。《汉语》に“臊儿”（积義“男阴”）で立項。“臊子”とも作るとする。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》、《现代北京》、《河北方言》に未収。

《汉方大》(p.7267)に“臊子”（积義“男人或雄性动物的生殖器（常用于骂人）”）の方言点を冀魯官話（山東省）とする。

《現漢方大》(p.5766)に“臊子”（积義“男性生殖器（含粗俗意）。無雅俗特色的中性叫法是‘老八儿’”）の方言点を金華とする。

近世語辞典類では《例释》に积義（1）“人或动物雄性的生殖器”で《醒》第六十七回、《金瓶梅詞話》より挙例。积義（2）“骂人的话”で《真本金瓶梅》、《醒》第八十九回より挙例。

《古方言》に“臊儿”（臊子、嫖子）で立項し、その按語に“山东方言仍有‘臊子’一語。《醒》亦作‘臊’，如第六十七回”とする。但し、人民文学出版社本、古本小说集成本、排印本上海古籍出版社、齐鲁書社本はその箇所を“臊子”とする。《例释》、《方言俗语》にも収録。《百部小说》に“雄畜生殖器”として収録。

《醒》の例。黄肅秋注に积義“男性生殖器”とする。

素姐罵道：“你是人家那雞巴大伯。臊子大伯。…”（89.10b.4）

（素姐は罵って「あんたは陰莖伯父さんだ。チンチン伯父さんだ！」と言った）

常功…道：“…。送給他去也只是‘驢臊子上畫墨線，沒處顯這道黑’，只怕惹的他還屌聲噪氣的哩。”（67.14a.7）

(常功は…「…。奴にくれてやってもただ『ロバのおちんちんに墨を塗る、ってな訳でその墨の色が分からない』で、無駄な事です。構って奴につべこべと言われるのがおちですよ！」と申します)

撩 liào (撿; 料)

積義:「捨てる、ほうる、投げる」。現代共通語では一般に“扔掉; 抛; 放”。

《現漢》、《古今》、《汉语》はいずれも“撿”(積義“(1) 放; 擱。(2) 弄倒。(3) 抛弃; 抛”)と作り、一般語語彙として収録。《現漢》の親字“撿”項に旧字体を示す括弧で“撩”とする。《拼音词汇》は“撿”に俗語符号の〈口〉を付す。

方言辞典類では《山东》、《北京话》、《现代北京》、《徐州方言志》、《关中方言》に“撿”と作り収録。《河北方言》の“撿”は詞目“放置”項に収め、“撿了”は詞目“擦掉”(=“摩擦使干净”)、“丢了”(=“丢失”)項に収めるが、これらは意味が少し異なる。《汉方常》にこの意味では未収。

《汉方大》(p.7027)に“撩”で積義“丢; 扔; 抛弃”。この方言点を膠遼官話(山東省烟台、牟平、萊陽。遼寧省大連)、江淮官話(江蘇省淮陰、南通)、西南官話(四川省成都。湖北省武昌)、吳語(上海市。江蘇省蘇州、丹陽、金壇西崗、靖江)とする。

一方、“料”(p.5141)に積義“扔; 弃; 撿”の方言点を晋語(山西省臨県、介林)、江淮官話(安徽省合肥、淮安)、西南官話(雲南省昆明)とする。そして、《后庭花》、《聊齋俚曲集》等より挙例。また、“擱”(p.6496)に積義“扔; 撿”の方言点を冀魯官話(山東省淄博)とし、《聊齋俚曲集》より挙例。なお、“撿”(p.6793)に積義“抛; 放; 扔”は未収。

《現漢方大》(p.5345)に“撩”の方言点を萬榮(積義“扔; 投擲”)、福州(積義“順手一扔”)とする。また、“撿”の積義を“放; 擱”とする方言点を哈爾濱、揚州、西安、牟平、積義“扔掉; 抛弃”の方言点を徐州、積義“扔”の方言点を洛陽、烏魯木齊、丹陽、長沙、婁底。積義“隨便地放置、丟下”の方言点を南京とする。なお、“料”にこの積義は未収。そして“擱”字自体が未収。

近世語辞典類では《例釋》に“擱(料)”と作り《聊齋俚曲集》より挙例。《古方言》は元・鄭廷玉《后庭花》、《二刻拍案惊奇》、《红楼梦》より挙例。《方言俗語》に未収。

《醒》の例。

拾起那石灰，在那路旁大石板上寫道：“响馬劫人，已被拿獲。赶路勿給，不暇送官正法，姑量責網縛示衆。”寫完，撩下晁思才，衆人加鞭飛奔去了。(53.13b.2) (“那” = “塊”) (“給” = “忙”) (“已” = “己”)

(石灰の塊を拾い上げ、その道端の大きな石の上に書いた「追い剥ぎは既に捕えられた。先を急ぐゆえに役所へ護送する暇無く、ここに縛り皆に見せおく」。書き終えると、晁思才をほったらかして皆はラバに鞭を入れ飛ぶように走り去った)

你修得已是將到好處，再得二三年工夫就到成佛作祖的地位；要是撩下了，這前工盡弃，倒惱殺俺了。(85.12b.1) (“已” = “己”) (“工” = “功”)

(あなたは既に良い所迄修養され、あと二三年で成仏の地位迄得られます。それをもし放ったらかしにしたら、これ迄の功德が全て無くなり、私達も困った事になるのです！)

拎 līn

釈義：「提げる」。現代共通語では一般に“提”[tí]。《汉语》、《现汉》、(第一版・’79年版)に見える如く旧読音は[līng]であった。

《现汉》(第三版)、《汉语》に釈義“用手提”、一般語語彙で収録。《现汉》(第二版)、《古今》に方言語彙として収録。《拼音词汇》に[līn]、[līng]ともに未収。

方言辞典類では《汉方常》に釈義“提”で《吴》、《安庆方言词汇》、《河南方言资料》、《桂林方言词汇》、《广州话方言词典》、《昆明方言单音词汇释》に見えろし、特定地域を絞らず、周而复《上海的早晨》より挙例。《吴》は評弾《孟丽君・洞房刺奸》より挙例。

《山东》に釈義“提着”で省内方言点を臨朐とする。《北京话》、《现代北京》、《徐州方言志》にも収録。《河北方言》に未収。

《汉方大》(p.3251)に方言点を東北官話、中原官話、江淮官話、西南官話、吳語、粵語、閩語とする。

《基本词汇集》(p.4184)の詞目“提”項に“拎”を指す方言点は長春、丹東、白河、昭通、遵義、貴陽、柳州、安慶、蕪湖、合肥、歙県、徐州、連雲港、漣水、揚州、南京、南通とする。

《汉方词》の詞目“提”[tí]項で“拎”を指す方言点は、官話の武漢、合肥、揚州、吳語の蘇州、粵語の広州、閩語の建瓯の如く、広域に渡っているが、北方官話の冀及び魯方言区域を示していない。《闽南方言》に釈義を“古指用手提起，方言指两人共提一物的动作”とし、やや異なるゆえ、《汉方词》にも閩語では建瓯のみの方言点なのである。

《现汉方大》に“拎”(釈義“提起(東西);提”)の方言点を哈爾濱、揚州、南京、武漢、洛陽、丹陽、蘇州、杭州、金華、海口、徐州、貴陽、上海、広州、東莞とする。

近世語辞典類では《古方言》に“拎”[līng]を釈義“手提物”で《广韵・平青》：“拎，手悬捻物”。郎丁切。音灵”とし、明・路惠期《鸳鸯缘・遗约》、《儒林外史》より挙例。

《醒》の例。

把唐氏の頭割在床上，方把晁源的頭髮打開，挽在手内，往上拎了兩拎，說道：“晁源醒轉來，拿頭與我。”(19.14b.10)

(唐氏の頭をベッドの上で切った。そして、晁源の頭髮を分けて手の中へ引っぱり、提げて「晁源、起きろよ。お前の首はもらうぜ!」と言った)

鄰舍 línshè

釈義：「隣近所」。現代共通語では一般に“邻居”。

《现汉》、《古今》、《汉语》いずれにも釈義“邻居”、一般語語彙として収録。《拼音词汇》に〈方〉符

号を付して収録。

方言辞典類では《汉方常》に呉方言とし、魯迅《祝福》より挙列。《山东》は“邻舍家；邻室家；邻家；邻宿儿”等と作り、《吴》は“邻舍；邻舍隔壁”で収録。《北京话》、《现代北京》、《河北方言》に未収。

《汉方词》の詞目“邻居”項で“邻舍”を指す方言点は、官話の済南（“邻舍 [家]”）、呉語の温州、湘語の長沙、双峰、贛語の南昌、客家話の梅県、粵語の広州（“[隔篱] 邻舍”）の如く、広域にわたる。

《汉方大》(p.2768)に“邻舍”（积義“邻居；乡邻”）の方言点を江淮官話（江蘇省南通）、単なる官話（福建省南平）、呉語（上海市。浙江省温州、蒼南金郷、紹興、諸暨、王家井。江蘇省靖江、溧陽）、湘語（湖南省長沙、双峰）、贛語（江西省南昌。福建省建寧）、客話（福建省明溪）、閩語（福建省沙県。広東省海康）とする。

同義語“邻舍家”（积義“邻居”）の方言点を冀魯官話（河北省青島。山東省済南、寿光、博山）、呉語（浙江省永康、諸暨王家井）とする。同義語“邻舍人家”の方言点を呉語（江蘇省靖江）とする。なお、当然ながら“邻居”は未収。

《現漢方大》(p.5252)に“鄰舍”（积義“邻居”）の方言点を績溪、崇明、上海、杭州、寧波、温州、長沙、南昌、萍郷、黎川、于都とする。同義語“鄰舍家”の方言点を済南、积義“邻居”の方言点を牟平、揚州、洛陽、太原とする。

近世語辞典類では《例释》に“邻舍家”（积義“邻家；邻居”）を《元曲选・老生儿》、《水浒传》、《真本金瓶梅》、《醒》第十三回より挙例。《方言俗语》、《古方言》に未収。

《醒》は《山东》に収める語彙と同様の“鄰舍：鄰舍家：鄰家”を有す。

“鄰舍”の例。

差人極了，只得教他將左右對門的鄰舍告在兵馬司裏，強他買房。(82.12b.4)

(役人は慌てて、仕方なく周りの近所の人々を兵馬司に訴え、無理やり家を買うようにした)

“鄰舍家”の例。

一个鄰舍家劉芳名欺他是外處人，詐了他四十兩，擡材的詐了八兩，…。(81.13a.6)

(隣の劉芳名は、彼女はよそ者だと騙し、四十両かすめ取り、棺桶かつぎは八両騙し取り、…)

“邻舍家”は《汉方大》に方言点を冀魯官話（河北省青島。山東省済南、寿光、博山）、呉語（浙江省永康、諸暨、王家井）とする。

“鄰家”の例。

鄰家請你赶餅，你就與他去赶赶不差。(4.10b.4) (“赶” = “擻”)

(隣家がカンピンを食わせてくれるから、お前さんはちっとは作るのを手伝ってもよいのだ)

淋醋 lincù

积義：「酢を濾す」。現代共通語では一般に“醋汁一点一点滴下来”。

《現漢》、《古今》、《汉语》、《补》いずれにも未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》、《现代北京》、《河北方言》に未収。

《汉方大》に积義“做醋时，醋汁在容器的小孔中一点一点滴下来”の方言点を冀魯官話（山東省）とし、《醒》第二十六回より挙例。

《現漢方大》(p.4033)に“淋醋”（积義“過濾醋，使醋渣分離出去，留下醋液，是做醋的最後一道工序”）の方言点を萬榮とする。

近世語辞典類では《例释》に积義“做醋的原料配好发酵变酸之后，把它放入一个器具中，下有小孔，醋汁便一点一点滴下来”で《醒》第二十六回より挙例。《百部小说》、《方言俗语》、《古方言》に未収。

《醒》の例。

且是那極敦厚之鄉，也就如那淋醋的一般，一淋薄如一淋。(26.1a.8)

(極めて実直温厚な村でもさながら酢を濾す如く、一濾しごとに薄くなってゆきます)

夾着尾巴淋醋的一般溺尿，唬這們一遭，…。(61.6b.7)

(尻尾を巻いて酢を濾す如く小便を垂れてしまいます。このような驚きに出くわし、…)

領犂 lǐngshāng (領墒)

积義：「鋤で田畑を耕すとき主導の働きをする」。現代共通語では一般に“拉犁耕地时，起主导作用”。

《现汉》、《古今》、《汉语》、《补》に未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《山东》に“领墒”（“用两个牲口耕地时，挑选健壮的牲口套右侧，让它走在前一个犁所翻耕出的墒沟里，以保证犁子前进的方向稳定”）を収録。《汉方常》、《现代北京》、《河北方言》に未収。

《汉方大》(p.5607)に“领犂”（=領墒）（积義“拉犁耕地时，居于主导地位”）の方言点を冀魯官話（山東省）とする。

《現漢方大》(p.5196)に“領墒”は未収。

近世語辞典類では《例释》に积義“拉犁耕地时，居于主导地位”で《庄农日用杂字》、《醒》第七十九回より挙例。《百部小说》にも収録。《古方言》の按語に“‘犂’即‘墒’之借字。《字汇》：‘墒，新耕土也’。‘犁沟’即‘墒沟’。领墒的牲口，必选力大驯熟者。其他同耕牲畜谓之‘拉梢’”とする。《方言俗语》に未収。

《醒》の例。

這牛從此以後：耕地，他就領犂；…。(79.3a.7)

(その牛はこれより後、田畑を耕す時主導的な働きをした。…)

流和心性 liúhé xīnxìng

积義：「優柔不断な性格、流動的な性格」。現代共通語では一般に“随和心性；温顺心性；温和脾气”。

《现汉》、《古今》、《汉语》、《补》に未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》、《现代北京》、《河北方言》に未収。

《汉方大》(p.5124)に积義“温柔性情；温和脾气”の方言点を冀魯官話（山東省）とし《醒》第六十六回より挙例。

《現漢方大》(p.3425)に“流和心性”は未収。

近世語辞典類では《例釋》に積義“溫柔性情；溫和脾氣”で《醒》第六十六回より挙例。《百部小説》に収録。《方言俗語》、《古方言》に未収。

《醒》の例。

誰知這狄希陳的流和心性，一見个油木梳、紅裙粉面的東西，就如螞蝗見血相似，甚麼是肯開交。

(66.3b.4)

(ところが、この狄希陳の優柔不斷で流されてゆく性格ゆえ、油髪木櫛、赤いスカートに白いおしろいものを見るや、さながら大きな蛭が血を見るが如く、もはやどうにもならなくなるのです。どうして解決できるでしょうか)

流水 liúshuǐ

積義：「すぐに」。現代共通語では一般に“立刻；马上”。

《現漢》、《補》にこの積義を未収。《古今》に積義“急忙；趕緊”を近世語語彙、《汉语》に積義“流動之水；亦喻迅速或連接之意”、一般語語彙として収録。

方言辞典類では《漢方常》、《山東》、《現代北京》、《河北方言》に未収。胡適「考証」に積義“马上；一口气”とする。

《漢方大》(p.5121)に積義[副詞]“立刻；马上”の方言点を冀魯官話(山東省)とし、《醒》、蒲松齡《聊齋俚曲集・姑婦曲》より挙例。

《基本词汇集》(p.4504)の詞目“马上”項に“流水”を指す方言点は未収。

《漢方詞》の詞目“马上”項で“流水”を指す方言点は無い。

《現漢方大》(p.3424)に“流水”は未収。

近世語辞典類では《例釋》に積義“立刻；马上”で《醒》第三十四回、蒲松齡《聊齋俚曲集・姑婦曲》より挙例。《百部小説》、《古方言》にも収録。

《醒》の例。

晁夫人道：“真也罷，假也罷，外邊請坐。”叫小廝們：“外邊流水端果子鹹案，中上座了。”

(21.12b.1)

(晁夫人は「本当であれ、ウソであれ、それはいいですから外の間へどうぞお掛け下さい」と言い、小者達には「外の間へ早く果物、料理をお持ちして、上座へ案内しなさい」と言いつけた)

又見老鴿子合孫蘭姬再三勸他說：“我不是嫌你。你進了學，也流水該到家，祖宗父母前磕个頭兒。…”(38.11b.10)

(また、やり手婆々と孫蘭姬は再三彼に勧めて「私にあんたのことが嫌いではないのよ。あんたが上の学校へ行けば、直ちに家へ戻ってご先祖様や両親の前で挨拶しなくちゃいけないからなのよ。…」と言った)

留心 liúxīn

積義：「気を付ける、注意する」。現代共通語では一般に“注意；留神；小心”。

《現漢》（積義“注意”）、《古今》、《漢語》いずれも一般語語彙として収録。《拼音词汇》にも無標示で収録。

方言辞典類では《漢方常》に積義“留神；小心”で呉方言とする。《吳》にも収録。但し、呉語のみの語彙ではない。河北省の方言語彙を集めた《河北方言》の詞目“留神”項に“小心”、“在意”等と共に収録。省内方言点として、唐山、天津、石家荘、邯鄲、保定、承徳の各地区を挙げる。北方方言系の辞典類《山東》、《北京話》、《現代北京》に未収。

“留心”は《漢方詞》の詞目にこれ自身が組まれるくらい普遍的な語である。詞目“留心”の項で“留心”を指す方言点はほぼ全域に及んでいる。即ち、官話の北京、濟南、武漢、成都、合肥、揚州、呉語の蘇州、温州、贛語の南昌、客家話の梅県、粵語の広州、陽江、閩語の建瓯である。

《基本词汇集》(p.4208)の詞目“留神”項で“留心”を指す方言点は張家口、太原、錦州とする。

《漢方大》に未収。方言と見なしていないのである。

《現漢方大》(p.3324)に“留心”（積義“把要辦的事記在心上，隨時注意”）の方言点を濟南、南京、崇明、蘇州、温州、南昌、梅県、東莞とする。

近世語辞典類では《例釋》、《方言俗語》、《古方言》に未収。

《醒》の例。

親家只替我留心躡訪个好學問的，俗請了他來家，管他的飯，…。(33.9a.4)

(あなたが私どもの為に気を付けて良き学問を修めている人を捜して下さるなら、家へ来て戴いて食事は面倒見させて貰いましょう。…)

琉璃 liúli (又) liúli

積義：「(氷の) つらら、氷」。現代共通語では一般に“冰锥 (儿) [bīngzhuī (r)]；冰”。

《現漢》、《古今》、《漢語》、《補》いずれにもこの意味では未収。

方言辞典類では《山東》に積義“房檐上垂着的冰锥”（「軒下に垂れ下がる『つらら』」）と積義し、山東省内の方言点は曲阜、濟寧、莒県ゆえに比較的魯西、魯南を指す。《河北方言》の詞目“冰锥儿”項で“琉璃”を指す省内方言点を邯鄲地区大明、曲周とする。《考論》にも収録。

《漢方常》に河南方言で積義“雹子”（ひょう）とするが、どちらも「氷」である点が共通項である（《漢方常》は更に同じ“琉璃”項で北京等地方言とし、“土法制作的玻璃”〈旧来の製法で作ったガラス〉とする。これは《現代北京》にも収録。《漢方大》に北京官話とする）。《北京話》に未収。

《漢方大》(p.5248)に積義“冰锥儿”の方言点を冀魯官話（天津）、中原官話（河南省開封、商丘、汝陽。山東省費県）、晋語（河北省邯鄲）とする。

《現漢方大》(p.3519)に“琉璃”は未収。

近世語辞典類では《例釋》、《方言俗語》、《古方言》に未収。

《醒》の例。

靴底厚的臉皮，還要帶上个棉眼罩，呵的口氣，結成大片的琉璃。(88.2a.9)

(長靴の底のような厚さの面の皮に、更に、綿の眼帯をつけ、はあと息を吐けば大きなつららを作った)

この他に《醒》には“琉璃”で「ガラス」と積義すべき箇所もある。その例。

回到家中，叫人捍炮焔，買鬼臉，尋琉璃喇叭，踢天弄井，無所不至。(33.6b.9)

(家へ帰ってから人を呼んで爆竹を鳴らしたり、鬼の面を買ったり、ガラスのラッパを求めたりして、その腕白さときたらあらゆる悪さをしたものです)

碌軸 liùzhou (又) liùzhóu

積義：「農業用の石ローラー」。現代共通語では一般に“碌碡 [liùzhou (又) liùzhóu]”。単に「同音仮借語」の如く思われる。

《現漢》、《古今》、《汉语》、《補》に“碌軸”では未収。但し、“碌碡”ならば《現漢》、《古今》、《汉语》に積義“农具，用石头做成，圆柱形，用来轧谷物，平场也叫石碾”、一般語語彙として収録。(《汉语》は“碌”を [lù] のみの読みとする)。《拼音词汇》に“碌碡”を軽声語で収録。

方言辞典類では《山东》に“碌碡”で収録。《河北方言》は詞目自身に“碌軸”とする。《汉方常》、《現代北京》に未収。

《汉方大》(p.6453)に“碌轴”(積義“碌碡”)の方言点を冀魯官話(河北省。天津静海)、膠遼官話(山東省萊陽)とする。

《現漢方大》(p.4763)に“碌碡”(積義“一種農具，用石頭做成，圓柱形，用來軋穀物，平場地”)の方言点を済南、西安、西寧、萬榮、忻州、丹陽とする。

近世語辞典類では《例釋》に“碌轴”(積義“碌碡”)で《醒》第七十九回より挙例。《百部小説》に収録。《方言俗語》、《古方言》に未収。

《醒》の例。

那日正在場，將他套上碌軸，他也不似往時踢跳，跟了别的牛沿場行走。(79.3a.4)

(その日は丁度穀物の脱穀をする日で、そいつにローラーをつけたが、昔のように蹴ったり跳ねたりしない。他の牛の後について脱穀場に沿って歩くのです)

攏帳 lǒngzhàng

積義：「決算する、清算する」。現代共通語では一般に“結帳”。

《現漢》、《汉语》に未収。《古今》は“拢”の意義項“归拢；总合”の用例に“拢帳”を一般語語彙として収録。《補》に積義“結帳”で方言語彙とする。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》に積義“結帳”で北京方言として浩然《艷陽天》より挙例。《山东》にも収録。《現代北京》には同音語“拢账”と作り収録。《北京話》、《河北方言》、《徐州方言志》に未収。

《汉方大》(p.3202)に“拢帳”(積義“結帳”)の方言点を北京官話(北京)とする。

《現漢方大》(p.6129)に“攏帳”は未収。

近世語辞典類では《例釋》、《方言俗語》、《古方言》に未収。

《醒》の例。

唬得狄希陳越發不出頭。衆人見狄希陳不出攏帳，越發作起惡來，罵的管罵，打家伙管打家狄。

(83.4a.4) (“打家狄” = “打家伙”)

(脅されて狄希陳はいよいよ姿を出す勇気がない。皆は狄希陳が出て来て褒美を出さないと見ると、益々悪行を働き始める。罵る者は罵り、家財を打ち壊す奴は打ち壊すのやりたい放題です)

摟吼 lǒuhǒu (又) lǒuhou

積義：「見る」。現代共通語では一般に“看”。

《現漢》、《古今》、《汉语》、《補》に未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《山东》に“睺候”“睺睺”(積義“偷偷地盯着”)で立項する。《汉方常》、《现代北京》、《河北方言》に未収。

《汉方大》(p.6032)に“摟吼”(積義“即‘睺睺’。看(贬)”)の方言点を冀魯官話(山東省)とする。

《現漢方大》に“睺睺”(p.5696)、“摟吼”(p.5057)は未収。

近世語辞典類では《例釋》に“《昌东县志・方言志》作‘睺睺’，此种写法较妥”とする。《方言俗語》、《古方言》、《百部小説》に未収。

《醒》の例。黄肅秋注に積義“摟；摟抱”(抱きつく)とする。左並旗男訳も「抱きつく」と積義する。しかし、方言用法で「見る」とすべきではないか。

那一日，我又到了他那裏，周大孀子往娘家去了，他又摟吼着我頑。(72.10b.6)

(その日、私はあちらさんへ行ったのです。すると周さんの奥さんは実家へ帰っていました。あの方は私を見てふざけようとされました)

漏明兒 lòumíngér

積義：「かすかに見える」。現代共通語では一般に“稍微看见一点东西；透明儿”。

《現漢》、《古今》、《汉语》、《補》に未収。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》、《现代北京》、《河北方言》に未収。

《汉方大》(p.6936)に“漏明兒”(積義[動詞]“指眼睛还稍微能看见一点东西”)の方言点を冀魯官話(山東省)とする。

《現漢方大》(p.5273)に“漏明兒”は未収。

近世語辞典類では《例釋》に積義“(眼睛)稍微看见一点东西。漏明兒，透明兒”で《醒》第四十九回より挙例。《百部小説》、《方言俗語》、《古方言》に未収。

《醒》の例。

晁夫人問説：“你婆婆的眼也還漏明兒。”回説：“漏明兒倒好了，通常看不見。…”（49.10a.2）
（晁夫人は「あんたのお姑さんの目はまだ見えるのでしょうか？」と尋ねますと「かすかにでも見えるのならいいのですが、通常は見えなくなりました。…」と答えます）

爐 lú

積義：「[動詞] とろ火であぶる、焙じる、火にかける」。現代共通語では一般に“焙”[bèi]。

《現漢》、《古今》、《汉语》、《補》いずれにもこの意味では未収。《拼音词汇》に収めるのは名詞「コンロ、ストーブ」の用法であろう。

方言辞典類では《山东》、《北京方言》、《現代北京》に積義“放在炉子里烤”（コンロにかけて火で焙る）で収録。《山东》は積義“焙”で魯西の荷沢、陽谷の省内方言点を示す。《汉方常》、《北京话》、《河北方言》、《徐州方言志》、《吳》に未収。

《汉方大》に“放在炉子里烤”と積義、方言点を北京官話（北京市）、膠遼官話（山東省膠県）とする。

《現漢方大》（p.6246）に“爐”（積義“在炉子裏烤”）の方言点を洛陽とする。動詞としては洛陽のみとする。

近世語辞典類では《考論》に積義を「あぶる」とし、「蒸す」とはしない（《考論》p.181）。《例釋》、《方言俗語》、《古方言》に未収。

《醒》の例。この“爐”を黄肅秋注では“蒸”とする。しかし、実際は「あぶる」のであって“蒸”（蒸す）ではない。

相棟宇説：“僭每日喫那爐的螃蟹 乍喫這炒的，怪中吃。我叫家裏也這們炒，只是不好。”（58.3a.5）
相棟宇は「私は毎日とろ火にかけたカニを食べていますが、今この炒めたのを食べると、とてもおいしい。私は妻にもこの様に炒めさせているが、おいしくないね」と言った）

碌 lù （擻）

積義：「ひとしきり叱る」。現代共通語では一般に“（严厉）训斥”。現代規範化文字では“碌”を一般に“擻”とする。

《現漢》、《古今》に積義“擻”で方言語彙とする。《汉语》に“擻”字を未収。《拼音词汇》にも未収。

方言辞典類では《汉方常》に“擻”（積義“训斥；斥責”）を北方方言とし、張天民《创业》、浩然《艳阳天》より挙例。《山东》（p.371）に“擻”（積義“批评；训斥”）の省内方言点を済南、桓台、青州、陽谷、曲阜とする。《現代北京》に“擻”（積義“批评；指责；训斥”）とする。

《汉方大》（p.7041）に“擻”（積義“批评；训斥”）の方言点を東北官話（東北）、北京官話（北京）、膠遼官話（遼寧省大連。山東省長島）とする。

《現漢方大》（p.6013）に“擻”の方言点を哈爾濱（積義“训斥；斥責”）、牟平・柳州（積義“训斥”）、揚州（積義“训斥；斥責”）、積義“揍；打”の方言点を済南、揚州とする。なお、“碌”（p.4763）に積

義“训斥”等は未収。

《醒》の例。

你這們涎不痴的，別說狄大嫂个快性人，受不的這們頓碌，就是我也受不的。(64.10b.6)

(あんなのようなボサーとしているのには、狄奥さんはきびきびしていますから、こんなに叱られるのには耐えられないのは勿論、私だって耐えられませんよ)

近世語辞典類では《例释》、《百部小说》、《古方言》、《方言俗语》に“擻”（碌）は未収。この理由は“頓碌”と捉えていたからである。(《例释》、《百部小说》に“頓碌”を积義“折腾”、《古方言》に积義“放置一旁；不闻不问”とする)。同様に、《汉方大》(p.4755)も“頓碌”で一語と捉えている。この結果、“頓碌”(积義“折腾”)の方言点を冀魯官話(山東省)とする。

陸 lù (掬；擻)

积義：「(かぶっているものを)取る」。現代共通語では一般に“摘；卸”。

《现汉》、《古今》、《汉语》、《补》にこの意味では未収。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》、《现代北京》、《河北方言》に未収。

《汉方大》に“陸”(积義“把穿起来或戴起来的東西拖下来”)の方言点を冀魯官話(山東省)とし、《醒》第三十二回より挙例する。なお《汉方大》の“擻”“擻”にこの积義は無いが、“掬”に积義“(把穿起来或戴起来的東西)拖下来”の方言点を冀魯官話(山東省淄博)とし、《聊斋俚曲集・快曲》より挙例。

《现漢方大》の“陸”はこの意味では未収。同書“擻”、“擻”(p.5609)にも积義“拖下来”は無い。

近世語辞典類では《例释》に积義“把穿起来或戴起来的東西拖下来”で“掬”を《聊斋俚曲集》より挙例。同音語“陆”を《醒》第三十二回より挙例。《百部小说》にも収録。《古方言》に“掬、擻、陆、掬”で立項。この按語に“今多写作‘擻’”とする。《方言俗语》に未収。

《醒》の例。黄肅秋注に积義“同擻。卸下、摘掉”とする。

一邊就摘了帽子，陸了網子，脱了布衫子，口裏罵說：“……。”(32.8a.5)

(一方で帽子を取り、頭の網を取り、木綿のシャツを脱ぎ、口では罵って「……。」と言います)

露撒 lùsǎ

积義：「発露する。流露する」。現代共通語では一般に“流露”。

《现汉》、《古今》、《汉语》、《补》に未収。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》、《现代北京》、《河北方言》に未収。

《汉方大》(p.7497)に积義“流露”の方言点を冀魯官話(山東省)とし、《醒》第十五回より挙例。

《现漢方大》(p.6266)に“露撒”は未収。

近世語辞典類では《例释》に积義“流露”を《醒》第十五回より挙例。《百部小说》、《古方言》、《方言俗语》に未収。

《醒》の例。

晁大舎走到原先住的東書房內，叫了晁書，晁鳳到跟前，說道：“…只知道，休叫老奶奶聽見。就是別人跟前也休露撒出一个字来。…”（15.6a.1）

（晁大舎は以前住んでいた東側の書齋の中へ歩いて行き、晁書、晁鳳をそばへ来るよう呼んで「…。ただ、ワシらが知っているだけで、お母さんには聞かれないようにしてくれ。たとえ他人の前ではほんの少しでさえ漏らしてはいかんぞ。…」と言った）

绿威威 lǜwēiwēi

積義：「微かに緑色を出す」。現代共通語では一般に“微微发绿”。

《現漢》、《古今》、《汉语》、《補》に未収。

方言辞典類では《漢方常》、《山東》、《現代北京》、《河北方言》に未収。

《漢方大》（p.5870）に積義“微微发绿（褒）”の方言点を冀魯官話（山東省淄博）とする。

《現漢方大》（p.5330）に“绿威威”は未収。

近世語辞典類では《例釋》に積義“微微发绿。含有褒義。微微，詞尾”で《醒》第二十八回より举例。

《百部小説》にも収録。《古方言》、《方言俗語》に未収。

《醒》の例。

合夥砌了池塘，夏秋積上雨水，冬裏掃上雪，開春化了凍，發得那水绿威威的濃濁，頭口也在裏面飲水，人也在那裏邊汲用。（28.8a.3）

（仲間で小さな池を掘り築き、夏秋に雨水を溜め、冬に雪を掃き集め、春に溶かす。それは緑色の濃い濁水。家畜もそれを飲み、人も汲んで用いる）

卵袋 luǎndài

積義：「陰囊」。現代共通語では一般に“陰囊”。

“卵”が《現漢》に積義“舉丸或阴茎（多指人的）”（「舉丸」或いは「陰茎」）で方言語彙とする。それを包む“袋”ゆえに「陰囊」となるのはごく自然である。

“卵袋”は《現漢》、《古今》、《汉语》、《補》いずれにも未収。《拼音词汇》にも未収。

方言辞典類では《宁波方言词典》（汉语大词典出版社）に積義“陰囊”で収録。《吳》、《現代北京》、《河北方言》、《漢方常》など多くに“卵袋”としては未収。

《汉语异名辞典》（湖北人民出版社，1994年刊）に収録。

《漢方大》に積義“陰囊”で方言点を西南官話（湖南省嘉禾龍潭墟。雲南省玉溪、澄江）、吳語（浙江省金華岩下）とする。

《現漢方大》（p.1876）に“卵袋”（積義“陰囊”）の方言点を寧波、温州とする。また、同義語“卵袋（兒）”の方言点を黎川とする。

《醒》の例。

王振只得一个王振，就把他的三魂六魄都做了當真的人，連王振也只得十個没卵袋的公公；…。

(15.1a.10)

(王振は一人の王振でしかない。彼の三魂六魄がみな本当の人間を形成していれば、王振を入れても十人の睾丸の無い宦官でしかない。…)

“卵”はその形状から見て「睾丸」を指すのは自然で、この後、派生義で「陰茎、男根」をも指すようになったのであろう。複音節語“卵袋”を収録する辞典類はごく少ないが、単音節語“卵”(=“睾丸或陰茎”)の場合は方言語彙と指摘するのが多く見られる。

“卵”は《現漢》に積義“睾丸或陰茎(多指人的)”、方言語彙として、《古今》、《汉语》に一般語語彙として収録。

方言辞典類では《汉方常》に“卵”一字で“男阴”(男根)と積義、《吳》、《南昌方言词汇》に見えるとする。《吳》に“男子或雄性动物的生殖器；特指阴茎”と積義する。

《上海方言志》に“卵：(1) 男阴，一般指阴茎。(2) 胡说。(3) 女性生殖细胞”と積義する。《宁波方言词典》は単音節語“卵”を未収。しかし、“卵”をもとにした複音節語“卵子”(=“陰茎”)、“卵毛”(=“阴毛”)、“卵浆”(=“精液”)、“卵袋”(=“阴囊”)等を収録。

複音節語“卵脬”(「睾丸と膀胱」または「睾丸」)が《醒》に見える。その例。

武城縣這些势利小人，聽見晁秀才選了知縣，又得了天下第一个美缺，恨不得將晁大舍的卵脬扯將出來，大家扛在肩上；又恨不得晁大舍的屁股撅將起來，大家舐他的糞門。(1.4b.7)

(武城県のこれら勢力や金に弱い人間は、晁秀才が県知事に選ばれたと聞くと聞かや天下第一の官職を得たと褒めます。そして、晁大舍のキンタマを引っ張り出して皆は肩にかつぎたくてたまらない。また晁大舍のお尻をつかんで肛門を舐めたくてたまらないのであります)

“卵”が「陰茎」を指すのはどの区域の方言か。

《汉方词》の詞目“鸡巴”(通俗語：「陰茎、ペニス」)の項で“卵”を指す方言点は官話の武漢、呉語の蘇州、温州([臀]卵脬)、湘語の長沙、双峰(卵子)、贛語の南昌である。これらは主として中国中東部で揚子江よりも北方には概ね見られない。

《方言俗语》に積義“蛋。明・李实《蜀语》：‘禽卵曰弹’。卵的俗语，宋元多写作‘弹’，明代以后始流行写‘蛋’。另，男子阴囊也叫蛋。(中略)今江浙地区及南昌话仍多说卵”とするが、これは《汉方词》の指摘する方言点と合致する。

ただ、閩南方言研究者林宝卿は閩南語についても“卵”が「睾丸」、また、ここから派生して「陰茎」を指すという(《閩南方言》p.196)。しかしながら、閩南のどの方言点かは記していず、列挙する古漢語資料の出典箇所は悉く《汉语异名辞典》と同一である。

「男根、陰茎」を共通語と方言から分けると次の表になる。

男 根	共通語	陰茎(或睾丸)
	方言	卵

“卵”の本義は《说文》、《廣韻》で“凡物乳無者，卵生”と称する如く、「たまご」である。では、いつから「睾丸、男根」を表すようになったのか。古代中国語に“卵”の「睾丸」用法は中国伝統医学用語として《靈樞》で行われたにすぎない（医学書《靈樞》の成立は前漢末、後漢初と一般に言われている）。

では「たまご」を表す語は、共通語ではどのようなものがあるか。現代中国語では“蛋”[dàn]を用いる。さすれば、“蛋”と“卵”とはどう異なるのか。地理的には“卵”は南方語である。

《汉方词》の詞目“鸡蛋”項で“鸡卵”を指す方言点は呉語（温州）、客家話（梅県）、閩語（廈門、潮州、福州、建瓯）とする。即ち、北方の“蛋”に対し、南方の“卵”は呉語南部、客家、閩方言に分布する。

《基本词汇集》(p.2985)の詞目“鸡蛋”項に“卵”を指す方言点は無い。

《現漢方大》(p.4081)に“蛋”の積義“鳥、龜、蛇等産の卵”の方言点を徐州、貴州、萬榮、蘇州、南昌、太原、丹陽、崇明とする。なお、積義“鷄蛋”の方言点を洛陽、丹陽、崇明とする。また、積義“陰囊”を指す方言点を徐州、太原、忻州とする。なお、“蛋”の第二義としての“睾丸”の方言点を洛陽とする。“蛋子兒”（積義“睾丸”）の方言点を洛陽、西安とする。

“蛋”は意味的に「硬い殻がある」のに対し、“卵”は必ずしも硬い殻があるとは限らない。

“蛋”と“卵”を口語的か、書面語的かで区分すれば、“蛋”は口語的、“卵”は書面語的である。なぜならば、“卵”を伴う複音節語“卵翼”（庇護する）の如きが書面で存在するのに対し、“蛋”を伴う語は書面語に無い（“卵翼”は《現代常用文言書面語》に収録することからも“卵”は書面語を形成する証左になる）。

“蛋”は《说文》に“𩇑：南方夷也。從蟲，延聲，徒旱切”とする。《廣韻》も積義は同じ。“𩇑”は南方海岸に居住する蛮族を指した（現在では“𩇑(𩇑)”とも表記する)。“蛋”は俗字で、借りて「たまご」の意義に用いる。

では、いつ頃から「たまご」の意義に用いたのか。《方言俗語》は宋元代は多く“彈”と記し、明代以降に同音語“蛋”を用いたとする（明・李实《蜀語》：‘禽卵曰彈’を引用し、“卵的俗語，宋元多写作‘彈’，明代以后始流行写‘蛋’”。p.324）。《辞源》は“蛋；古只作‘彈’”とする。このように、初めは多く“臉彈”“鷄彈”の如く“彈”字を用いた。

羅 luó

積義：「(子供を)作る、かき集める」。現代共通語では一般に“收罗；收得”。

《現漢》、《古今》、《汉语》、《補》に未収。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》、《現代北京》、《河北方言》に未収。

《汉方大》(p.3394)に積義“收罗；收得”の方言点を冀魯官話（山東省淄博）とし、《醒》第七十六回より挙例。

《現漢方大》(p.6258)に積義“收罗；收得”は未収。

近世語辞典類では《例释》に积義“收罗；收得”で《醒》第七十六回より举例。《古方言》は积義を“胡拉乱扯”とし、その按語に“‘罗’今俗可以重叠为‘罗罗’。例中的‘罗’指妇人在外行为不端”とする。《百部小说》にも収録。《方言俗语》に未収。

《醒》の例。

素姐故意在他窗外放炮焔，打狗拿鷄，要驚死那个孩子，又與調羹合氣，說是孩子不是他公公骨血，是別處羅了來的。(76.2a.6)

(素姐は故意に調羹の窓の外で爆竹を鳴らしたり、イヌを殴り、ニワトリの首を絞め、赤子を驚死させようとする。また、調羹と喧嘩し、赤子は義父の血を分けたのではなく、別の所で作ったのだと言う)

你知道你又得了兄弟了。一年羅一个，十年不愁就是十个。(76.4a.9)

(あんたにまた兄弟ができたのを知っている？一年に一人だよ、十年では必ずや十人になるんだよ！)

囉咤 luózào (羅皂)

积義：「騒ぐ、騒ぎたてる」。現代共通語では一般に“吵闹；嘈杂”。

辞典類には口偏の“囉”と作る。《现汉》に“囉咤”(积義“吵闹寻事(多见于早期白话)”)として一般語語彙、《古今》に近世語語彙、《汉语》に一般語語彙として収録。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》(口偏の無い“罗咤”のみ)、《吴》(口偏の無い“罗咤”のみと口偏の有る“囉咤”の両方を収録)に积義“嘈杂”で蘇州方言とする。近世語で多く用いられ、現代では蘇州に現存しているのである。従って、北方方言系の辞典類《山东》、《北京话》、《现代北京》、《河北方言》、《徐州方言志》に未収。

《汉方大》に口偏の無い“罗咤”の方言点を呉語(江蘇省蘇州)とする。但し、口偏の有る“囉咤”は相当広域に渡る。即ち、方言点を冀魯官話(山東省臨清。河北省雄県)、西南官話(四省省)、呉語(江蘇省蘇州。浙江省定海)とする。それに、积義“纠缠不清；吵闹寻事；麻烦他人”も異なるようにしているが、“羅咤”と“囉咤”は単なる異体字であって、积義まで異なることはないと思われる。

《現漢方大》に“羅咤”、“囉咤”は未収。“羅嘈”(p.6160)(积義“亂哄哄”)の方言点を蘇州とする。“囉嘈”(p.6350)(积義“吵闹；嘈雜”)の方言点を福州とする。

近世語辞典類では《例释》、《方言俗语》、《古方言》に未収。

《醒》の例。

真君也憑他囉咤，不去理他。(28.10b.10)

(道士様もそいつが騒ぐに任せ、構いませんでした。)

口偏の無い“羅咤”の例。

就是薛教授皓然了鬚眉，衣冠言動就合个古人一般，也便不好把他毆打。看來羅咤程樂字是真。(35.12a.10)

（たとえ薛教授の髭と眉が白くなっているけれども、着物や冠を昔の人と同じようにしていて、とても彼を殴ることはできにくい。どうやら程楽宇の方に因縁をつけるのは本当のようだ）